

眞曆考



二五  
921



亥

曆

表



をかしありては古夏の代りハ今の正月を正月と  
せしを殷の代りハ今の十二月を正月とし周の代  
りハ今乃十一月を正月としおのくその月を  
年の始と爲されと三正と云ひて例の皆理ある事  
終てくつひちるせども由りハ終ては是て其の  
事と改むるをよきとする國俗なればは已が功  
を示せしとせむかし縁る事と改免する所なる  
事とも世中終てあるふよくばこそはあめあれ  
する事の俄よかりて中終てははるればは已が功

民の煩ワツシとなりては是れはいさうもなりしされば  
ても周乃代中ともふこの民も終てははるればは  
まふ夏の代り定め終て今の正月を正月とし  
居しとも存つれは是れも正朔を改むるハ民の  
事と改むるをよきとする國俗なればは已が功  
を示せしとせむかし縁る事と改免する所なる  
事とも世中終てあるふよくばこそはあめあれ  
する事の俄よかりて中終てははるればは已が功







その春乃そとど先ハ。其れより年終始るれば上よらふ  
とくめて。夏秋冬のもど先ねくむすも。又そのをりこの  
物のうを見受て知せり。一。善のそとめと回して  
天のきし。日結出入り。月結光の清さ。あさきふ  
考へ。あるハ。本草れう人をさく。此木乃花さくハ。その季結  
そのうち。其乃木の實あるハ。それと木のそのほ。こら  
季れ生あるは。いつり川でち。その草結枯るハ。川  
乃い流やぐ。あるハ。回る川物留つものり。つ葉を  
も。輪のくり。さふあるは。そのやど。夏の穂のあり。むハ

其のころ。とらふ。とく。あるハ。善れと。よふ。ゆ。い。ち  
つ。を見。虫の。穴。か。れ。物。を。う。か。び。な。じ。は。て。天  
地のう。ふ。を。あ。く。に。志。さ。び。く。う。り。ま。か。ら。る。物。  
より。する。む。某。季。の。いつ。や。ぐ。ハ。さ。び。あ。き。り。々。

上なる天をそと。季ハみるさ。下なるも皆  
ある。じ。日。時。を。日。季。と。も。い。ひ。あ。く。よ。ふ。あり。  
某。を。その。し。む。

後の世ハ。ハ。曆。し。つ。物。有。し。月。日。の。あ。じ。め。ハ。こ。あ  
ゆ。づ。く。あ。く。あ。よ。天。地。の。間。乃。物。の。う。を。見。受。て。考。へ



ひ物くもとに常ツネおむをつまぎざれば見てもん志る  
とれ一それバ今の人をどのちりハ上件カモノシヤリのどく  
して定免むをバおやつをまてしとどくぞれど  
いよ一とみのおうめ一代りハあつた然レカして  
定むるなむひまり一は人まふくしとて  
あつて遠タカおしなまりに一とて何とむむを  
つまぐつと訓ぬる事やふもつまはおまぎざれ  
あつてハあひのやうおまおまかまおあるお  
なり万葉集の新ふもさうしと天アメのかさハ此

ゆふべ履くまむどく春とらりも又うらあむどく春  
あらぬり一とが門カドの柳乃うれよ春をさる春過  
てなまてし一白シロぬの衣レなり何れのかど山  
妹イモがよをとら一お池乃浪るより鳥音トリノネをよなく  
秋をぬり一まじしとるみる見まくおふりて  
その時を志ぬる越オモヒまて上つ代の意ココロふとるなり  
昔があらふまをてしと大津新ハおま人の志ココロ  
をすしとえそなり一と志ろ一免しはる湯ユぬるる  
をやけかうしとおまおれどとらふか二二三



種といふは春交新をいづまはれ一季と種は  
間の正なり下おいつても皆同トそらぞ

とみ三つおかいつるのこゝそその海の日次やをいづく  
の日くやをささえりやふありきされは年終りて先  
季のほど先をいふまはやふ某日よりとふたぐその日  
数りてかゝるは幾十日とささふは何とぞてふ系  
大らうりたるむ育ける。

年おの季乃日数も始の日とささやうたる定ま  
るはたうりてくぞも神代よりて美新年をさ

種来りぬその何ひごふか来りたるは昔の人の  
中ふはかこく思ひごとらとされしものもさな  
よ育ぬはれは暦はねもみかこふふこはやく  
まゝと事もあるやうたふ何とぞれもかしく人  
種といはれどつる心やく人乃をも大らうふるむ  
有れば世間ふまゝとありまぬるは誠志はて  
考へまゝむ乃そ後しをまればたぐりてこゝを  
新まのふ大らうとささるはなとぞとされどあし  
なごころよ人のさとりも大らうこよはせ一季



一、時お定知れしと如く、其のハ、まづて上、  
代り、<sup>ヒトフタミ</sup>一二三より千第といふまで、<sup>キタヨロク</sup>一、物の敷を  
計<sup>カッ</sup>める名よこそ有れ、<sup>ツイデ</sup>次第をいふ名よ、<sup>ヒトレカフタシカク</sup>何とぞ  
<sup>ツイデ</sup>里、<sup>ツイデ</sup>物の次第を一云二云とぞいふまで、<sup>ツイデ</sup>あまの  
里とて、<sup>ヨミ</sup>讀われ、<sup>ツイデ</sup>後、<sup>ツイデ</sup>の事なり、<sup>ツイデ</sup>かゝる、<sup>ツイデ</sup>ま  
一二三如く、<sup>ツイデ</sup>いふ、<sup>ツイデ</sup>敷をいふ、<sup>ツイデ</sup>あま、<sup>ツイデ</sup>次第をいふ、<sup>ツイデ</sup>あま、  
<sup>カネモチ</sup>兼用する字たるあり、<sup>モジ</sup>さあ、<sup>ツイデ</sup>あまの、<sup>ツイデ</sup>所、<sup>ツイデ</sup>く、<sup>ツイデ</sup>それ、<sup>ツイデ</sup>が、<sup>ツイデ</sup>う  
流りて、<sup>ツイデ</sup>こそ、<sup>ツイデ</sup>次第をいふ、<sup>ツイデ</sup>り、<sup>ツイデ</sup>も、<sup>ツイデ</sup>用、<sup>ツイデ</sup>る、<sup>ツイデ</sup>お、<sup>ツイデ</sup>く、<sup>ツイデ</sup>ひ、<sup>ツイデ</sup>り、<sup>ツイデ</sup>ハ  
な、<sup>ツイデ</sup>り、<sup>ツイデ</sup>ぬ、<sup>ツイデ</sup>れ、<sup>ツイデ</sup>な、<sup>ツイデ</sup>り、<sup>ツイデ</sup>然、<sup>ツイデ</sup>よ、<sup>ツイデ</sup>ハ、<sup>ツイデ</sup>何、<sup>ツイデ</sup>と、<sup>ツイデ</sup>友、<sup>ツイデ</sup>友、<sup>ツイデ</sup>の、<sup>ツイデ</sup>言、<sup>ツイデ</sup>よ、<sup>ツイデ</sup>物、<sup>ツイデ</sup>の、<sup>ツイデ</sup>つ

い、<sup>ヒトフタミ</sup>ど、<sup>ヒトフタミ</sup>を、<sup>ヒトフタミ</sup>一、<sup>ヒトフタミ</sup>二、<sup>ヒトフタミ</sup>三、<sup>ヒトフタミ</sup>を、<sup>ヒトフタミ</sup>い、<sup>ヒトフタミ</sup>つ、<sup>ヒトフタミ</sup>何、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>ふ、<sup>ヒトフタミ</sup>な、<sup>ヒトフタミ</sup>し、<sup>ヒトフタミ</sup>り、<sup>ヒトフタミ</sup>の、<sup>ヒトフタミ</sup>倭、<sup>ヒトフタミ</sup>建、<sup>ヒトフタミ</sup>命、<sup>ヒトフタミ</sup>  
ふ、<sup>ヒトフタミ</sup>そ、<sup>ヒトフタミ</sup>又、<sup>ヒトフタミ</sup>な、<sup>ヒトフタミ</sup>り、<sup>ヒトフタミ</sup>一、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>よ、<sup>ヒトフタミ</sup>敷、<sup>ヒトフタミ</sup>り、<sup>ヒトフタミ</sup>ハ、<sup>ヒトフタミ</sup>九、<sup>ヒトフタミ</sup>夜、<sup>ヒトフタミ</sup>日、<sup>ヒトフタミ</sup>ハ、<sup>ヒトフタミ</sup>十、<sup>ヒトフタミ</sup>日、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>  
よ、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>も、<sup>ヒトフタミ</sup>日、<sup>ヒトフタミ</sup>次、<sup>ヒトフタミ</sup>の、<sup>ヒトフタミ</sup>流、<sup>ヒトフタミ</sup>い、<sup>ヒトフタミ</sup>ど、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>は、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>ん、<sup>ヒトフタミ</sup>敷、<sup>ヒトフタミ</sup>を、<sup>ヒトフタミ</sup>い、<sup>ヒトフタミ</sup>ふ、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>敷、<sup>ヒトフタミ</sup>を、<sup>ヒトフタミ</sup>い、<sup>ヒトフタミ</sup>ふ、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>  
ハ、<sup>ヒトフタミ</sup>上、<sup>ヒトフタミ</sup>つ、<sup>ヒトフタミ</sup>代、<sup>ヒトフタミ</sup>り、<sup>ヒトフタミ</sup>有、<sup>ヒトフタミ</sup>り、<sup>ヒトフタミ</sup>又、<sup>ヒトフタミ</sup>み、<sup>ヒトフタミ</sup>り、<sup>ヒトフタミ</sup>ハ、<sup>ヒトフタミ</sup>播、<sup>ヒトフタミ</sup>磨、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>や、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>ら  
や、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>み、<sup>ヒトフタミ</sup>り、<sup>ヒトフタミ</sup>ほ、<sup>ヒトフタミ</sup>も、<sup>ヒトフタミ</sup>三、<sup>ヒトフタミ</sup>日、<sup>ヒトフタミ</sup>結、<sup>ヒトフタミ</sup>日、<sup>ヒトフタミ</sup>の、<sup>ヒトフタミ</sup>潮、<sup>ヒトフタミ</sup>よ、<sup>ヒトフタミ</sup>ハ、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>ん、<sup>ヒトフタミ</sup>敷、<sup>ヒトフタミ</sup>  
敷、<sup>ヒトフタミ</sup>の、<sup>ヒトフタミ</sup>流、<sup>ヒトフタミ</sup>い、<sup>ヒトフタミ</sup>ど、<sup>ヒトフタミ</sup>速、<sup>ヒトフタミ</sup>とい、<sup>ヒトフタミ</sup>つ、<sup>ヒトフタミ</sup>ふ、<sup>ヒトフタミ</sup>く、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>ん、<sup>ヒトフタミ</sup>杖、<sup>ヒトフタミ</sup>綱、<sup>ヒトフタミ</sup>や、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>古、<sup>ヒトフタミ</sup>事、<sup>ヒトフタミ</sup>  
紀、<sup>ヒトフタミ</sup>傳、<sup>ヒトフタミ</sup>建、<sup>ヒトフタミ</sup>造、<sup>ヒトフタミ</sup>雷、<sup>ヒトフタミ</sup>神、<sup>ヒトフタミ</sup>の、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>よ、<sup>ヒトフタミ</sup>い、<sup>ヒトフタミ</sup>つ、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>ぬ、<sup>ヒトフタミ</sup>り、<sup>ヒトフタミ</sup>又、<sup>ヒトフタミ</sup>万、<sup>ヒトフタミ</sup>年、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>集、<sup>ヒトフタミ</sup>  
の、<sup>ヒトフタミ</sup>奇、<sup>ヒトフタミ</sup>な、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>み、<sup>ヒトフタミ</sup>三、<sup>ヒトフタミ</sup>日、<sup>ヒトフタミ</sup>月、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>よ、<sup>ヒトフタミ</sup>あ、<sup>ヒトフタミ</sup>ら、<sup>ヒトフタミ</sup>も、<sup>ヒトフタミ</sup>三、<sup>ヒトフタミ</sup>日、<sup>ヒトフタミ</sup>の、<sup>ヒトフタミ</sup>月、<sup>ヒトフタミ</sup>と、<sup>ヒトフタミ</sup>い、<sup>ヒトフタミ</sup>つ、<sup>ヒトフタミ</sup>



をう其日とハ定めて志のびも一をむすく  
 上つ代りハさるる事をも一々其季のそ  
 乃ほごちらふおさごおさくおとをり一なり  
 後の代乃ども其月の某日や定むハ正一さふ似  
 くれども元て曆乃月次日次ハ季結終なりとは  
 せごひゆきをせご一か一終ハ去年の三月乃晦  
 今年ハ四月の十日ごろあつれば満ハ十日なり  
 も遠ひく月ハ其月よあつぬなりも何るれば  
 中ふ其日ハハ一うやくるむ何るをこれ上つ

代のくくかもさるハ其人のうせみハ此樹の葉  
 終らりそ免一日をうなごく何ごむる成よ年ご  
 せふ其日ハ満ハれそ日お欠なりあつてさうふ  
 下お身とやこれハとは何さふ似て久めて正  
 正しく親一とるむ有る元て色は方又ゆくま乃  
 るをい川とさうそい之を近くも事ハ其月の  
 有ハ幾日子に某事ハあつむハいま幾日といひ  
 何るハ幾十幾日中くその季乃そのくも某事ハ  
 有ハ今幾十幾日何りて其の季のそれハ其







そのまゝ二月を三つよまきみくつらつらめら成て  
そりとりそはまが西の方乃やる日の入ぬ所ふ  
月乃西のふ見しをす。比を始としてそれより十日  
ばりがやどかきそ。月立としり。月乃西よりよ立ぬ  
とほごるれバヤも。

月立ハ清いころ。

報の始を定むると日次りハかろくは。今の二日  
乃日おまれ三日の日おまれ昏お月の見しをむ  
日を始とせり。曆お報する日ハいあむ月とさ

是はあむ晦の末なり。かろくは。合報といひく  
月と日やほそしく一方お會ていそかそ月乃  
光の見し。日次報ハはあれど。空國の古た  
報ついでといそと。月立のまそそ。月おそりに  
立ち見ぬをす。かろくは。立ちハやるも。そよ  
そ屋を落たむの立ハ下より立の海をとり。成これ  
ハ西の方へ下ふころ。バ立といふま。あつふ  
似くし。昨日まで。きりし。物。あつふ  
ハ。立のり。お同。そ。あつふ。あつふ。あつふ。



つらかりまして今望モテの極キを十五六日といふまで  
十四五日又ある日といふハ上つ代の朔ツイタテを曆の  
二日三日ごちあるればなり。さて候物候ふそのち  
みち月のちらぶりなり。ちればとあるハ中旬ナカゴロをひら  
とつり。六月ミナツキへかけていふハ後の初ハツをれど中旬ナカゴロを  
ちらぶり候いふハ右のコトバの初ハツをりなり。又  
万葉集三の巻終あり。家士ウヂノ乃ネ家ネの雪終事也。  
六月ミナツキノ十五日モチ小チ増チぬればとあり。其の月の事  
なして十五日をちらとつひち。これも右イニシなり。

さて末十日ごちりぐ候とを月隠ツクモリといひ。月のちらぶ  
小隠コヒりなりとあればなり。その中ミふ三十日ツカごちありあ  
ふ候と。月隠ツクモリ乃ネまはとやま。

月隠を候ごり。

此コノちらハ月終出るとおそく候と。ちらぶとちらぶと  
ふとしてすくぬくなりゆく候と。月ツクごちりといふ候と  
りハ月隠ツクモリのちコころ。月乃ツキかされてるぬをいふ候と  
も。さて曆法ヨリに依ヨリて思ふハ天ツラの月乃ツキ一ヒトかたり終  
まニ終ニた九日六時ありとて。廿九日ニあり。



四時の始終ヨツノトキとハおとれさるらつハシメヨリつユキちヒひて  
 とハ秋乃もみれツラち天の月をツゴモリ月徳の末月立のツイタテに  
 免みぬの時ありツレる。されどツルツキのツキありてツキもツキ一ツキ音ツキれ  
 ぶれツキのツキこれツキをツキあツキきツキしツキかツキつツキづツキるツキむツキ者ツキけツキる。  
 かくツキ二ツキとツキ別ツキてツキそツキ有ツキるツキれツキハツキ閏ツキ月ツキといツキふツキ物ツキとツキ加ツキへ  
 ぶれツキもツキ年ツキのツキめツキ分ツキれツキとツキかツキむツキゆツキくツキしツキなツキるツキ也。  
 くツキてツキこツキれツキ月ツキといツキふツキ方ツキ乃ツキ来ツキ経ツキもツキ朔ツキ望ツキ晦ツキあツキとツキハツキこ  
 じツキ免ツキつツキるツキ中ツキ比ツキ来ツキつツキるツキもツキもツキいツキつツキるツキのツキもツキりツキてツキこれツキをツキこ  
 いツキとツキめツキ日ツキ次ツキをツキなツキるツキ也。

此ツキ一月ツキをツキ三ツキつツキりツキ分ツキいツキつツキるツキ也ツキとツキまツキしてツキ日ツキ次ツキをツキなツキるツキ一  
 定めツキハツキ中ツキ着ツキまツキぞツキいツキづツキおツキとツキれツキりツキとツキ思ツキへツキてツキ古ツキ今ツキ集  
 春ツキ下ツキなりツキひツキづツキのツキ節ツキ辰ツキ乃ツキ奇ツキ此ツキ何ツキをツキよツキやツキいツキのツキつツキも  
 且ツキ也ツキ有ツキてツキ奇ツキよツキ六ツキ喜ツキハツキいツキとツキもツキあツキらツキいツキとツキ也ツキハツキとツキいツキ免ツキり。  
 そのツキ一ツキちツキまツキぞツキもツキ月ツキ乃ツキ来ツキつツキ方ツキとツキむツキろツキくツキ晦ツキといツキつツキりツキし  
 ありツキ一ツキ三十ツキ日ツキの日ツキよりツキハツキ前ツキのツキ事ツキをツキれツキどツキもツキ何ツキをツキあツキは  
 晦ツキといツキつツキるツキ所ツキりツキ。擧ツキるツキ成ツキ後ツキのツキ世ツキ乃ツキ釋ツキよツキ六ツキ世ツキ日ツキ乃ツキ日  
 ちツキれツキどツキもツキあツキらツキハツキ大ツキらツキふツキ然ツキれツキどツキめツキをツキりツキといツキつツキるツキハツキ右  
 乃ツキしツキをツキ志ツキすツキてツキ純ツキおツキ一ツキあツキらツキありツキ。さツキしてツキ又ツキ物ツキ説ツキ









神のあまふさはあまのついでにたれさるるなり  
きくち必別事ニトクこそ有ぬきこわのあまも  
あまのついでに上件ナミンクダリ上つ代乃事理のまぶまりを  
いふはる古き傳説ワカモノのあまもあまのついでにたれ  
しごとく事減りしごとく思ひらりて年月  
ふかくよ思ひ免を〜しておもひえつるおもむ  
きありたれどそハ程いなり有るむ今か〜をり  
ふハあまのついでに〜思ひらりておもむぬ人々あ  
まのついでにたれど〜思ひらりておもむぬ

わざおしり

これぞ天地乃ち免時ふ皇祖神乃造ツク  
て美神より授けおき給ふ天地乃ちあまのついでに  
暦ありてあまのついでに結玉をのど人の巧ウマシて作る  
よあまのついでに八百美あまのついでに結玉をのど  
もたぐり〜あまのついでに〜思ひらりておもむぬ  
あまのついでにあまのついでに〜思ひらりておもむぬ

皇祖神乃造りてあまのついでに結玉をのど人の巧  
あまのついでにたれど〜思ひらりておもむぬ

毛ろろ一結むるこの曆といふは神の事  
北風強るみよのひして聖人のあづかりて作りて  
民よ時を授けしとよむるよのあれど上件ウケウケの  
ごとく天地のおろけりなることみりて民ハ授  
きざれども時をばしつあつとくまるとしよあそ  
まの去年まじおきし青菘の花乃咲くを以て  
是苗代時をまりはつりおきし夏の穂乃何  
れを以てハ田植とよむるをまり又その稲の刈  
時トキを以て又まきく時をまりがめく年ふくじ

如てゆかばいそく其時を結むるごとく  
まきラレあつとく育つるをあがあつとくを  
ふかよそくかの西人乃とせなかりしはそその曆ハ  
月の大小と閏月ワレフツキとをりて新晦と節氣と遠マカね  
どくおろけりよあそせむとゆくあそいとも巧ウラミりハあ  
れれども於歳差サイサを以てしを育て数十年を経  
ぬれば一度イチドといふ程づきまひゆくを後の世りハ  
はゞくふ此あそふとくぬぬれども考つて  
よそしあつとくはれバをりくはその曆あつとめば

をえ何くば。又北斗七星の斗柄いし。子ネの月ホは  
ハ子ネの方カマは建スガし。寅トラの月ホは寅トラの方カマは建スガたりや  
つるを。今の世ウレは寅トラの月ホは寅トラ乃ホく。今ウレは建スガさびて。  
丑ウシの方カマは建スガをやいつり。それ妄ミヤウゴト説トはあはれ。多ホ一  
くおるとあり。さればかたてても。教ミナト子コ年ネンを經スれば。  
かくあひゆく。と見ミて。きれば。さあはれ。おかし。  
今イマや。そはたがひなく。考カウへ。ゆかりと思オモふ。ことごとく。  
あはれ。教ミナト子コ年ネンを經スる世ヨは。後ノチり。は。あひゆく。ことごとく。  
あはれ。と。ゆかり。かく。と。は。月ツキ日ヒ星ホシの。あはれ。も。何ナニも。

後ノチり。ハ。次ツイ序シか。く。み。を。乱ミダす。ゆ。く。ま。は。と。う。し。こ。が  
ふ。と。れ。ど。然シカり。ハ。何ナニも。後ノチり。ハ。月ツキ日ヒ星ホシの。あ。は。れ。  
を。皆みなあ。は。れ。り。昔ムカシ々々。い。く。昔ムカシ代トを。經スて。も。い。こ。う。も。  
あ。ひ。よ。お。り。ハ。あ。は。れ。を。教ミナト子コ年ネンの。や。ど。ふ。あ。ひ。よ。  
あ。は。れ。も。然シカた。が。ひ。も。そ。ゆ。ま。は。ハ。又またあ。は。れ。へ。く。る。年トシ  
り。て。そ。れ。も。ま。は。れ。ら。定サま。り。お。う。ら。ま。れ。ば。ま。ま。と。  
よ。あ。ひ。よ。の。あ。は。れ。は。浅アサく。う。り。や。あ。は。れ。た。ま。は。り。  
十ジュウ日ニチご。う。り。命イシチあ。は。れ。も。の。天テンあ。は。れ。の。形カサキも。せ。入イ  
ふ。あ。は。れ。も。あ。は。れ。を。あ。は。れ。と。い。て。あ。は。れ。ひ。ゆ。

物う那がどしそめて後ういふなりゆきあむ。  
とうごぶあぶしおのが命のみじうそて又始乃  
どくありうそむえんぶううれ疑ひたり然も  
バ曆法とりゆめを教ふ年を證さうれ教ふ年  
乃程ふあづるるもの又ふは復るをいへん  
も證さうそむすはましふ考へまはぬむすはえ  
何ぞういふ又考への精くありもそゆくまふく  
さあ結考へのあづるるれづあうよそあれ  
つはひりし書ふよ何ぞもあぬをこれも

又おまゆいばやうくよ中の方およりあざりそま  
ーかこの精くやうくはあうくお粗くりなるもの  
何ういれゆきありたりかうそつひよ中の域は復  
皇著さむ時りぞ皇國の上つ代乃ちうなりなる  
定中り純さあるほごをさとりなむりし但これ  
らハる結うそをゆきて倫ありそれあごあ  
何れらうくハつては月これ帝氣と天の月り  
よは月とを正し合はし何さうれ国月を  
おろすとするまはりハ是月のとがひ者そ正月の



必乃りあしる。又そあもなよりあ乃月  
 小ら月しつあもの者つれ。その名をさぬ。小  
 も有づ。万葉集りし月。所し。なる。あど  
 月よ。ま。し。あも。そ。能。相。た。ら。ま。  
 け。時。より。春。某。月。秋。某。月。を。く。月。の。名。と。あ。む。又。そ。れ  
 を。季。へ。け。し。し。あ。も。も。ら。り。る。さ。し。け。月。こ。乃  
 名。も。古。事。記。書。記。る。の。新。よ。一。つ。も。さ。る。は。な。し。ど。  
 を。ハ。の。づ。り。の。あ。も。も。あ。あ。あ。い。さ。な。れ。ハ。月。次。の  
 定。ま。り。せ。ら。る。の。な。ら。ぶ。し。万。葉。集。よ。ハ。あ。あ。く。さ。ら。り。

け。名。ど。も。の。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。三。月  
 二月三月あど。そ。は。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。  
 あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。  
 し。も。つ。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。  
 一。二。三。を。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。  
 ぶ。そ。か。く。月。次。の。さ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。  
 ども。の。天。乃。月。よ。ら。月。や。此。月。次。ハ。別。事。を。り。し。  
 又。い。く。の。日。や。い。く。日。次。一。月。の。日。数。乃。定。ま。ら。り。あ。ら。り。し  
 ぞ。ど。さ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。あ。ら。り。

此時より志う月次をささぐ九月乃名をこつま  
 きしう舟のやち曆を用ひくゆかこの月を二つ  
 み何れせ日次をもと小定ぬるしむよ指さば  
 うりやぞハ及バざりいひいひりりいひいひ  
 おわごも久しくあれ来つる事ハ手若うてふ  
 とうふ忍りぬるるいづる何一さるこいひ  
 ふ神代よりよま川あゆむるなるよあれま  
 世中能わこよ日次をもとさるやうり定なり月  
 乃大小望月なごりし事乃出まこつむよハ中

多きころころくきろか何りぬえくれハ俄よこ  
 まてハえ何りきむじよそけ時年の来経の月  
 次天の月よる月といハヤ別事なりしうば  
 正月の朔ハ月乃望の後十二月の晦をぐく組望  
 晦を月の名くきそりいひいひいひいひいひ  
 きハ行くるふ後りそふを月ひいひいひいひ  
 ありて乃何なり其夜ちむ月きいしハ月次乃  
 月の名組るどりうら天の月よる月のころ純  
 こりまバなりけ二うこの月ハ長き短ききら先









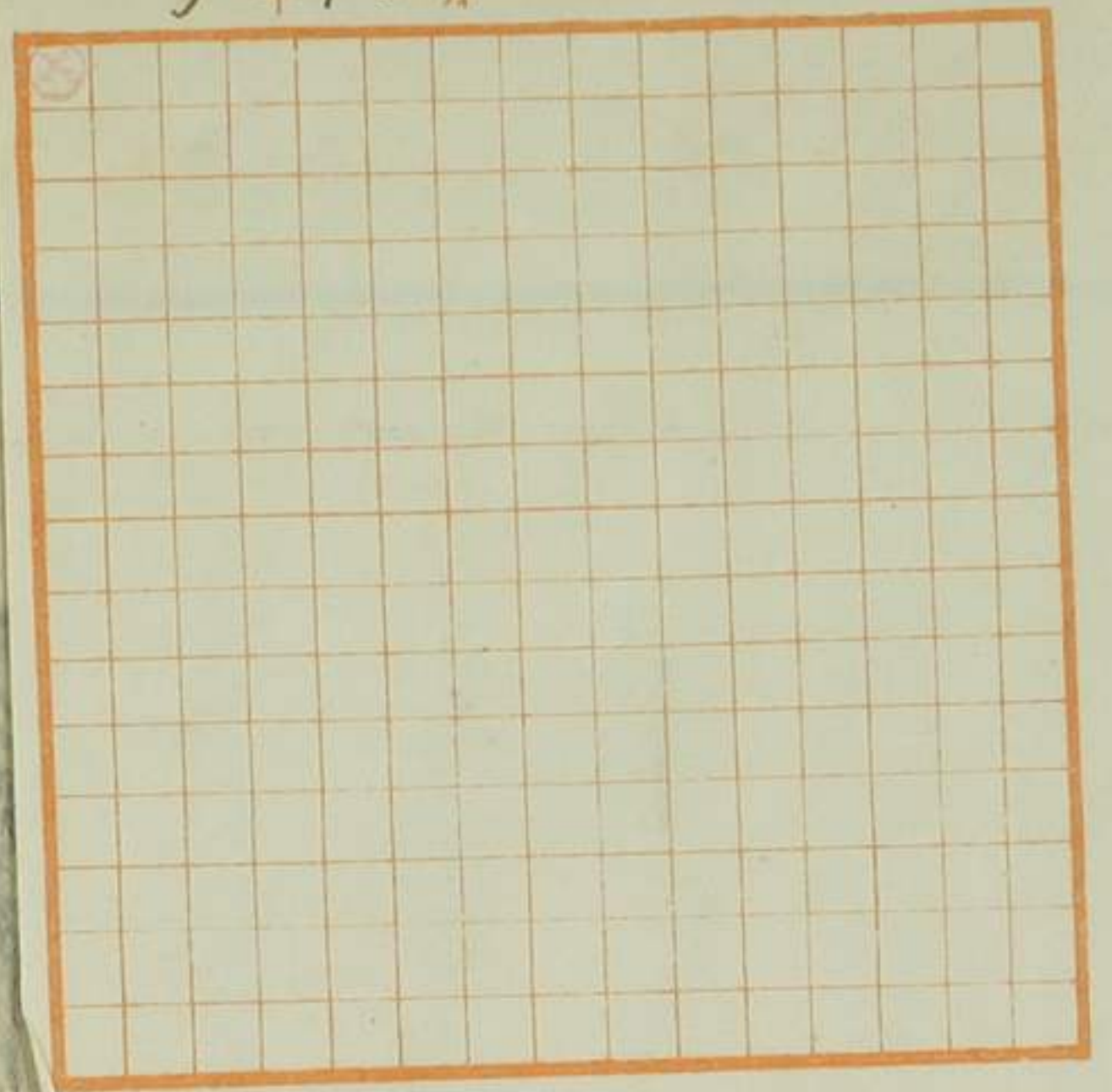


月を定むるに、<sup>ソノツキ</sup>某月の某日と定むべきなり。月よ大小  
 を<sup>ツキ</sup>知れば、年お<sup>ツキ</sup>国月を加へて、日<sup>ヒ</sup>次ぐ。天の月乃  
 知ざりやもあづひ。又月々の節氣も、みよるごとひ  
 ゆく知ればなり。まづ、曆法より、よりて見れば、  
 月の一めぐりハ、廿九日六時ありたり。大小を  
 分ちて、いつも三十日を一月として、<sup>ツキ</sup>朔を定め  
 ゆくバ、一年のやどり、あま日のあづひもあそく、  
 正月の朔を天の月よ合へて、<sup>ツキ</sup>むも、十二月よなり

ち、朔をせむ日、天の月を<sup>ツキ</sup>弦を定む。かゝし  
 めしゆて、五年ありたり。又、年のあそく、あ  
 づひも、そのあひびよ、朔より、天乃月<sup>ツキ</sup>あそく  
 たり。下弦<sup>ツキ</sup>強り、なり、朔より、廿二日ありむを  
 いて、ころも、あそく、朔より、ありあむや。又、年乃  
 一めぐり、結末<sup>ツキ</sup>強り、三百六十五日三時をれば、上  
 二月の日数、三百五十四日なり。とは、十一日む  
 くり、強り、あそく、あそく、十二月<sup>ツキ</sup>を、あそく、三十  
 日として、あそく、五日ありのき、あそく、あそく、<sup>ツキ</sup>国月



5年10月



江戸

大坂

伊勢太坂

京都

岡田屋嘉七

河内屋茂兵衛

河内屋藤兵衛

伊丹屋善兵衛

柏屋兵助

夷屋治助

山城屋佐兵衛

田中屋藤助

菱屋孫兵衛

江戸

大坂

伊勢太坂

京都

岡田屋嘉七

河内屋茂兵衛

河内屋藤兵衛

伊丹屋善兵衛

柏屋兵助

夷屋治助

山城屋佐兵衛

田中屋藤助

菱屋孫兵衛

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a small rectangular stamp at the top center.



